

「非社交と脱社交」

静岡県立大学教授・障害学会会長 石川 准さん (2003.12.3)



ご紹介: 高校時代に失明なさり、東大とニューヨーク州立大で社会学を学ばれました。昼は、アイデンティティ・ポリティックス論や感情社会学を専門とする社会学者、そして、夜はソフトウェアの開発をなさるといふスーパーマンです。日本語の文章を点字に翻訳する自動点訳ソフトなど情報処理技術分野のパイオニアであると同時に、『障害学への招待』『人はなぜ認められたいのか』『感情の社会学』など数々のご本があります。できたてのホヤホヤの障害学会の会長でもあります。

トークから:

いま書いている本の中に「配慮の平等」といふ章があります。

従来の常識では「配慮を必要としない人」と「配慮を必要とする人たち」がいる、って人々は考えてきたんです。「配慮を必要とする人たちには、優しさとか共感をもって配慮をしましょうね」みたいな話。だから、「人に優しいバリアフリー社会」ってよく言われます。けれど、これは正しくないと思っています。

正しくは、「すでに配慮されている人たちと未だあまり配慮されていない人たち」である。マーケットメカニズムを通して、配慮というのは為されるので、多い人たちの都合っていうのはだまっけても配慮されるんです。人に優しいって、「優しい」といふ言葉を使いたい場合には、「優しくされている人たちと、優しくされていないひとたちがいる」といふふうには考えていないと、話が進まないっていか、まず発想が最初のところで違ってしまうのではないかな、というふうには思っています。

例えば階段とスロープを考えてみると、階段は配慮とはみなされていないんですが、スロープは配慮だとみなされています。これは正しくない。なぜかという、階段を壊してみたらどうなるでしょう。階段がなくても二階に上れる人という、ロッククライマーと棒高跳びの選手ぐらいなんじゃないかな。つまり、高飛びできない人、ロッククライミングできない人々には、「すでに配慮されている」といふことです。自分たちが配慮されていることをすっかり忘れて「弱い立場の人たちを配慮しましょうね」といふ話はおかしいと思っていて、「配慮の平等」といふ言葉を使っています。

「Human rights」といってもいいんですが、日本では「人権」といふ言葉はあまり力をなげか持っていないで、人々の気持ちを揺さぶらないんですよね。「人権」といふ言葉をネガティブなものにしていく努力の方が成功してしまっけて、といえるかもしれません。「Human rights」といふ言葉は欧米社会ではまだ一定の力を持っていると思っけて、日本では「人権」といふ言葉はあまり力がない言葉かもしれません。それで、あえて同じような言葉なんだけれども「配慮の平等」といふ言い方をしています。

いま書いている本のタイトルは、「見えるものと見えないもの～社交とアシスト～」といふです。社交には、よそ行きの自分を見せる身振りというのがあります。自分の1番いいところを見せるっていふのは、「私はあなたに気に入られたいと思っけて」といふことでもあります。といふことは、「あなたのことを尊重している、あなたの存在を承認している

